

季刊せいてん no.135

●浄土真宗聖典の学習誌●

特集

深掘り歎異抄 その1

—『いつでも歎異抄』刊行記念—



1

『歎異抄』って？

B1

なぜ唯円？

B2

大切な証文

B3

悪人正機

B4

第四条

B5

信学

B6

B7

B8

江戸時代の庶民的な仏教書とお説教 / 近世中期の勸化本(一) 幸せってなんだろう / 鬼滅の刃
「唯信鈔文意」 / 関東の混乱と宗祖 「蓮如上人御一代記聞書」 / 浄土真宗の信心

「聞其名号」といふは、本願の名号をきくとのたまへるなり。
 きくといふは、本願をききて疑ふところなきを「聞」といふなり。
 またきくといふは、信心をあらはす御のりなり。

〔一念多念文意〕 六七八頁

〔聞其名号〕というの、本願の名号を聞くと仰せになつてゐるのである。聞くといふのは、如来の本願を聞いて、疑う心がないのを「聞」といふのである。また聞くといふのは、信心をお示しになる言葉である。〕

鳥取の妙好人(篤信の念仏者)である源左さんが、

この心に相談すりや、まあちよつと云うぞいな。いつ相談してみてもいけんけえのう。親さんに相談すりや、助ける、助ける、そのまんま助ける。いつ相談しても親さんは間違いないけんのう。

という言葉を残されています。自分の人生でありながら、このいのちは一体

どこへ向かつてゐるのか全く見当がつかまへません。そんな愚かな自分にくら相談しても答えが生まれませんので、「親さん」に相談するのです。「親さん」とは阿彌陀さまのことで、「親さんに相談すりや」とは「南無阿彌陀仏」のお念仏を通して「助ける、助ける、そのまんま助ける」と大悲をこめて招喚してくださる阿彌陀さまの声を聞かせていただくことです。このさわりなき

救いを告げる如来の喚び声を聞き受けているすがたを、浄土真宗では信心といひます。

親鸞聖人は阿彌陀さまのことを「極大慈悲母」「大安慰」等と言われていますが、それはわがいのちを支え、大きな安心を与えてくださる、まさに「親」のような存在として仰がれていたのでありましょう。「南無(まかせよ)阿彌陀仏(われに)」とは、阿

彌陀さまが私に救いを告げてくださるご自身の「名のり」です。聖人はその「名のり」を疑いなく聞くままが私の信心になるということをし、「きくといふは、信心をあらはす御のりなり」とお示しくされました。そして阿彌陀さまの「かならず浄土へと生まれさせましょう」という仰せを聞き受けた信心は、そのまま「かならず浄土へと参らせていただける」という安堵の心となるのです。

以前、地元の同年の友人から印象的なお話を聞かせていただきました。友人と会つたのは、彼のお母さんが病気で亡くなられ、四十九日の法要が終わつて少し落ち着いた頃でした。始めはいつものように他愛ない話をしていましたが、その日は少し感傷的になつていたのでしょか、友人はお母さんとの思い出を語ってくれました。それは一九九五(平成七)年一月十七日、私たちが小学校四年生の時に起こつた阪神・淡路大震災の時の話でした。私もその時のことを今でもはつきり

と覚えています。午前五時四十六分、いきなり「ドーンッ!」と底から突き上げる激しい揺れに襲われました。私が住んでいる兵庫県西宮市も甚大な被害を受けた地域で、当時住んでいた実家のお寺は本堂・鐘楼・山門が全壊するなど、とても現実とは思えない惨状となりました。幸いにも家族は全員無事でしたが、しばらくは落ち着かない避難生活を余儀なくされました。

友人は地震があつたその日の夜、たゞび重なる余震の恐怖でひとり布団の中で、なかなか寝つくことができなかつたそうです。その時、わが子の様子に気づいたお母さんが布団へやつてきて、「お母さんがいるから大丈夫、だから安心して寝なさい」と声をかけてくれたと言います。それまで彼は余震の恐怖や先行きの見えない不安の中にあつたが、お母さんの声によって安心して眠ることができたというお話でした。不安の中にあるわが子に親の方から近づき、「お母さんがここにいるよ」という自らの存在を告げる声が、

そのまま友人の安心となつたのです。「仏説無量寿経」の「讚仏偈」に次のようなお言葉があります。

われ誓ふ、仏を得たらんに、あまねくこの願を行じて、一切の恐懼(の衆生)に、ために大安をなさん。

(二二頁)

阿彌陀さまが法蔵菩薩であつたとき、「不安を抱えるあなたに安心を与えることができないうであれば、私は仏とならない」と誓われました。そして阿彌陀さまは私たちに称えられる「南無阿彌陀仏」の仏さまとなり、私の日常とひとつになつてくださいます。生きることに惑い、死ぬことに怯える私に阿彌陀さまはご自身の「名のり」によって安心を与えてくださいます。私が救われていく道は自分で作り上げるものでも、理解していくものでもありませんでした。いま届いてゐる声にただ身を委ねていく。阿彌陀さまは私のいのちに至り届き、いつでも「あなたを救う仏はここにいますよ」とやさしく抱き取ってくださいているのです。